

源智の井戸

源智の井戸の名はあまりにも有名です。毎日朝早くから多くの人が水をくみにおとずれ、井戸の周りは人がたえることがありません。

1 『善光寺道名所図会』に描かれた源智の井戸



水汲みの人がひきもきらない源智の井戸

左：『善光寺道名所図会』中の挿絵



「源智の井戸の筒は直径が8尺（約240cm）あり、高さは9寸（約27cm）である。きれいな水が湧き出していて、信濃では第一の名水である。松本中の酒はことごとくこの水で作られている。代々の領主はこの井戸に制札を掲げているが、井戸に制札とはめずらしいことである。」と書いたのは天保14年に『善光寺名所図会』を著した美濃の人豊田利忠です。

この井戸はもともと河辺縫殿之助源智（かわべぬいどののすげんち）という人物の屋敷の井戸だったので、その名から「源智の井戸」という名がつけました。井戸に個人の名がついていることも珍しいことです。

『善光寺道名所図会』の挿絵をみましょう。井戸からはたつぷりと水が湧き出し溢れています。井戸枠は丸い桶状で、その上に六角形の木枠が組まれています。井戸の周囲は石のように見えますが、四角い板状のものが敷き詰められています。井戸枠の後ろと横には流れが描かれ「源智川水源」と説明がついています。右手奥には石組みの上に水神様の祠があり、その横には制札が掲げられています。井戸のその奥には塀がめぐっています。井戸の周辺は木柵で仕切りがされていたようです。

井戸のなかを2人の人物がのぞき込んでいます。手前の者は一文字菅笠（すげがさ）をかぶり長羽織を着て、脚絆（きゃはん）をまいています。おそらく股引（ももひき）をはいているのでしょう。刀を2本束ねています。その奥の人物は着流し姿で腰に一刀を帯びています。一見旅姿に見えますし、『善光寺道名所図会』にあるところから、旅人がのどを潤しているところが描かれていると広く思い込まれてきました。

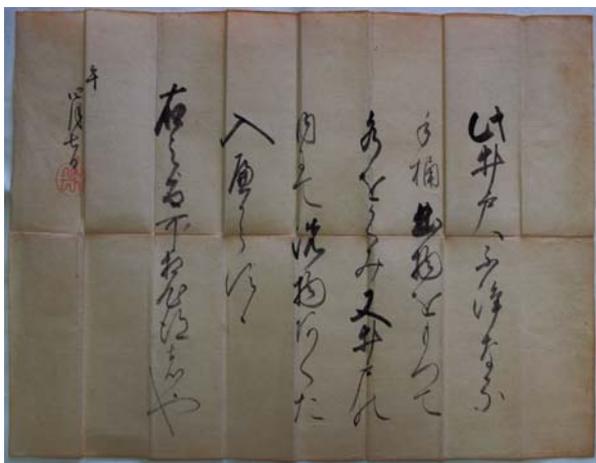
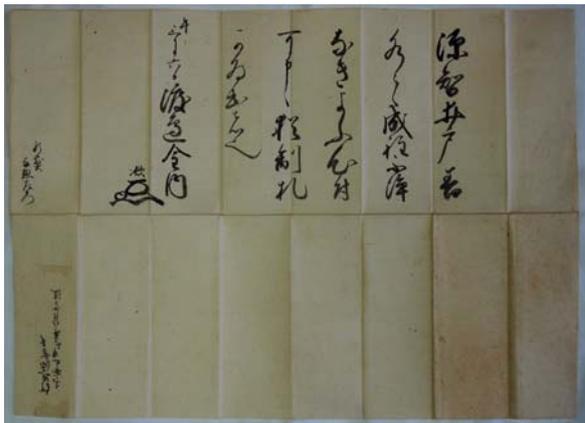
ところが、中川治雄氏は、この絵にえがかれた2人の人物はこの井戸を見回りにきた武士たちであるとみました。この見解は卓見だと思えます。一見旅人のように見えますが、一文字菅笠をかぶり長羽織をつけ脚絆を履くのは御徒士（おかち）の役目遂行の服装ですし、

後ろの人物も一刀を帯びているところをみるとその配下の同心かと思われるからです。ですからこれは、源智の井戸の水で渴きをいやす旅人ではなく、藩の役人が巡回にきて井戸の内部や周辺を確認している様子を描いたとみる方がよさそうです。

前回に水野氏時代に、源智川が汚れないように「川係り同心」を巡回させるという町奉行の命令だされたことを紹介しました。図会に描かれた時代は戸田氏の代ですが、源智の井戸にたいする藩の対応は継続していたと思えます。豊田利忠がわざわざ井戸に領主の制札とは珍しいことであると記したことが、この絵で表されているとみることができそうです。

現代に住む私たちからすれば、旅人がのどを潤している姿の方が庶民的ですし、たくさんの方が水を汲む現在にも通じるところがあってよさそうにみえますが、どうもそうではないようです。

2 松本城建設の年代を考察する史料に



石川氏時代に出された源智の井戸に関する文書（松本市文書館所蔵 河辺文書）

源智の井戸をよごさないようにせよという命令ですから、裏を返せば当時井戸を多くの方が使って汚れがきつくなっていたことを物語っています。この時期、多くの方が集まることとして考えられることは、築城や城下町の建設事業です。そこで、研究者は、井戸がよごれたのは松本城の建築が始まり多くの方が入り込んだためだろうと解釈し、文禄3年はまさにお城建築中だったと考えました。このように源智の井戸にだされた制札は、文禄3年から4年にかけて松本城が築城されたと考える傍証のひとつとなりました。

この井戸の水は、享保以前には松本城下の南部の町の人々が飲み水を汲みにきていました。時代が進むと湧水地帯から水を引いて、現在の水道のように使用することが行われるようになりました。しかし、水源から各地に引水されるようになって、この井戸

石川氏の代に松本城が築城されたといわれていますが、当時の史料が乏しくいつ造られたかが明確ではありませんでした。松本城が築城されてまもなく四百年になろうとするとき、松本城の築城年代を検討する委員会（国宝松本城築城年代懇談会）が立ち上げられました。そこでいくつかの史料とともに検討されたのが、源智の井戸に対する制札です。

石川康長は、午の三月に家老渡邊^{わたなべ}金内^{きんない}の名で肝煎^{きまじり}与惣左衛門あてに、源智の井戸は善水であるから汚れが生じないように気をつけること、制札をたてるようにすることを伝えています。また同年四月には朱印状で、汚れた手桶・曲物を入れて水をくむべからず、井戸のなかで洗い物をしたり汚れたものを入れたりするべからずと命じています。

これら2通の文書には年号はありませんが、午^{うま}年と記されています。石川氏が松本にいた間で、午年は1594（文禄3）年と1606（慶長11）年しかありません。この文書は石川氏が松本へ入ってきた1590年に近い文禄3年の午年だろうと推定されています。

からの引水は許可されず、もっぱら付近一帯の需要にあてられたといえます（旧版『松本市史』）。

3 その後の源智の井戸

江戸から明治に時代がかわっても源智の井戸は使い続けられました。けれども、明治になると18年ころに阿波国から来た加賀見菊蔵という人物が、高い梯子を組み立て鉄の棒を突きこんで井戸を掘る「突井」という方法を伝えました。この方法は好成績をあげ、特に源池・宮村・埋橋・東町・土井尻・大名町・伊勢町・大柳町・小柳町・緑町・上土・西堀・葵馬場などでは、明治から大正にかけて井が多く掘られました。その影響を受けて源智の井戸の湧水量が減少していったといえます。

明治44年には、史跡保存の意味から市が本町1・2丁目の引井権利者23人に譲渡し、大正13年に市の上水道が設置されるとしだいに利用頻度が落ちたと旧版『松本市史』は書いています。